

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (168)

2025 年 9 月の作品は

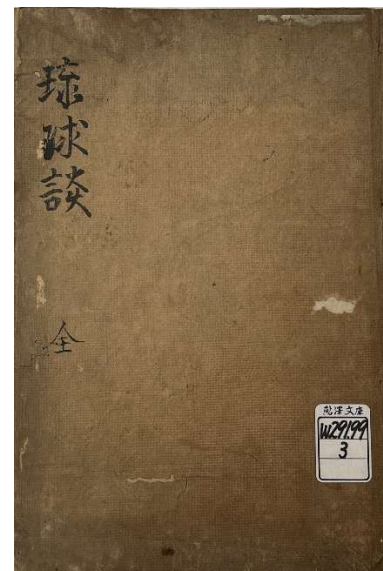
リゅうきゅうばなし
「琉球談」

— 異国琉球の姿 —

展示テーマ

～江戸時代の人々にとっての琉球とは～

1429 年、^{しょうはし}尚巴志 (1372—1439) によって統一された琉球は、中国と冊封関係 (※中国皇帝から国王の地位を保障される) を結ぶ中で行った中継貿易によって栄え、中国・日本・朝鮮を繋ぐ存在とされてきた。1609 年、近世琉球は中国との冊封関係を維持しつつ、薩摩藩の侵攻により事実上の支配下に置かれるようになったことで、「日中両属」「幕藩体制の中の異国」と位置づけられるようになる。今回私が取り上げる『琉球談』は、このような歴史的背景の中、近世琉球が江戸時代の人々の関心を集めていた時期に刊行されたものであり、人々にとって琉球を以前より身近なものに感じさせるような役割を担っていたと考えることができる。また、本書で記された琉球の風俗・地理・歴史は、江戸時代の人々の琉球に対する認識をそのまま映し出したようなものであると解釈することができ、それまで馴染みのない異国として認識されてきた琉球が、時代の変化の中で人々にとってどのような存在となっていたのかを読み取る材料となるのではないかと考えた。



リゅうきゅうばなし
『琉球談』(1冊)

江戸時代、寛政2 (1790) 年

作者：^{ちゅうりょう}森島中良 (1754～1810)

縦 22.4cm × 横 15.6cm

蘭学者、戯作者として活躍した森島中良が琉球に強い関心を持つ中で書いた琉球の地誌であり、30 項目にわたって琉球の地理・風俗・言語などが紹介されている。寛政2年の初版本から、同3年、7年、9年 (その他版行年不明) と多くの版本が普及しており、江戸時代の人々に広く読まれたものであることが考えられる。中国の琉球の地誌『^{ちゅうざん}中山伝信録』を書き下し、加筆したものとされている。

『中山伝信録』とは、康熙 58 (1719) 年、中山王世子尚敬を冊封するために来琉した冊封副使^{じょうほうこう}徐葆光が著したものである。徐葆光は琉球に約 8 ヶ月間 (1719 年 6 月～1720 年 2 月) 滞在し、その間さまざまな琉球の土地・制度・風俗を見聞し本書を作成した。江戸時代の知識人の琉球に関する知識の多くがここから学ばれたと言われている。また、『琉球談』刊行について^{しんしょうどう}申椒堂主人誌の一文には、華麗な唐風の装束をした琉球使者一行の行列などを見た当時の人々の中で琉球への関心が高まっていたこと、それに応えて琉球誌が出版されていること、そして『琉球談』もその一つであるということが記されており、当時の人々にとって本書が注目されるものであったことが考えられる。

展示のみどころ

～琉球を生きた女性たち～

本書では 30 項目にわたって琉球の地理や風土、歴史について挿絵を含め詳細に記されている。その中から今回は琉球の女性たちの生活を記したものに着目し、琉球において女性がどのような立ち位置にあったのか、また、本書

で記された琉球の女性たちが江戸時代の人々にとってどのような印象を与えたのかについて考えたい。

(1) 女市



この挿絵は辻山の海沿いで行われていた早晚両度市を描いたものであり、商人は全員女性である。魚類やさつまいも、豆腐、器具、陶器、草鞋などが商品として売られ、売買には日本の通貨が使用されていたという。私はこの挿絵において、琉球に完全に女性のみで構成された市があった

たということが非常に印象的であったとともに、当時琉球において男性だけでなく女性が家計を支える役割を担う体制が取られていたということが読み取れると考えた。また、日本の通貨が使用されていたことから、冒頭でも記したように琉球と日本が貿易上密接な関係を持っていたことが読み取れ、江戸時代の人々にとって親しみやすさを感じるようなものだったのではないかと予想する。

(2) 婦人の風土

この文において女性の装飾は、大家の女性なら金銀の簪、民家の女性ならたいまい玳瑁（カメの甲羅）で作った簪をさすとされている。この民家の女性がつけたとされる簪は上記の女市の挿絵にも描かれているものと考えられ、このことから女性の身分による装いの違いがうかがえる。また、琉球の女性の特徴として家柄に関係なく15歳になると入れ墨を行うことが記されている。「指の節の本に墨星を入、夫より爪ぎしまでまっすぐに黒すじを入墨にす」「夫より年々に増加ゆる事」と記されるこの入れ墨は「ハジチ」とも呼ばれ、女性が既婚であることを表すとともに、琉球の女性たちが祝福を受ける通過儀礼でもあり、ハジチがない女性は来世苦勞するという伝承もあったという。一

方、日本において、肉体美より着衣や香りなど暗い室内でも映える美しさが重視されるようになった7世紀中頃から17世紀初期において、入れ墨に関する資料は途絶えてしまっている。しかし、江戸時代、入れ墨は遊女と客が互いの名前を掘り、愛を誓うための方法として、また地肌をさらす町内の警備役や消防を担った鳶、飛脚が地肌を隠すための方法として好まれ、再び注目されるようになる。このことから、入れ墨が改めて普及し始めた江戸時代を生きる人々にとって、琉球の女性たちの入れ墨は自身が琉球で生きる女性であることや授かった祝福を体現したものとして、彼らの行う入れ墨と共通するものとして感じられたのではないだろうか。

これらのことから琉球の女性たちの生活には江戸時代の人々が共感できるような面が多くあり、本作品が江戸時代においてまだ異国として認識されることの多かった琉球を親しみ深いものとして普及させる役割を担っていたのではないかと考える。

参考文献

- ・森島中良[著];石上敏校訂『森島中良集』国書刊行会、叢書江戸文庫、1994年
- ・東喜望「近世中期の琉球誌」『沖縄文化研究』Vol. 2、p69-p96、1975年
- ・「【基礎からわかる】琉球王国とは？」読売新聞オンライン（最終閲覧日 2024年10月30日）
<https://www.yomiuri.co.jp/culture/20220429-0YT1T50165/>
- ・『琉球談』JAPAN SEARCH（最終閲覧日 2024年10月30日）
<https://jpsearch.go.jp/item/cobas-162558>
- ・『重刻中山伝信録一』琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ（最終閲覧日 2024年11月1日）
<https://shimuchi.lib.u-ryukyu.ac.jp/collection/nakahara/na11201>
- ・山本芳美「日本の入れ墨、その歴史」、ニッポンドットコム（最終閲覧日 2024年11月5日）
<https://www.nippon.com/ja/views/b06701/#>

あとがき ～貴重資料に触れて～

写真ではなく実際に貴重資料に触れたことで、本作品が刊行された当時の人々にとってどのような書物だったのかということについて深く考えることができたように感じる。また本作品を知るため中国・日本・琉球の歴史上の関係性について改めて学んだことによって、文中からもその歴史的背景が反映されているように感じる事柄を見つけることができ非常に興味深く、歴史を学び、実際にその資料に触れることの面白さを知ることができた。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。また利用は学術研究目的に限らせていただいております。
※過去の展示はオンラインでも公開中です！
※第169回展示は令和7年10月上旬からを予定しています。



令和7年9月1日発行
令和6年度 日本文化論B受講生 編集
236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2
横浜市立大学 学術情報センター